



小学校のシンボルツリー

明治6(1873)年に施行された学制により、津市内でも小学第一校(現在の養正小学校)をはじめとする多くの小学校が設立されました。今年は創立150周年を迎える学校も多く、こうした長い歴史を有する学校には「シンボルツリー」とも呼ばれる大木が残されています。

敬和小学校(中河原)のエノキ(写真①)は樹齢300年を超えるとも言われ、市内の学校に残る樹木としては最も古い部類でしょう。太い幹から分かれる南側の太い枝が折れてしまって往時の姿はありませんが、3メートルを超える幹周からその大きさと歴史を想像することができます。

栗真小学校(栗真中山町)には幅広く枝葉を伸ばしたシノキ(写真②)があります。昭和初期の校舎玄関前で朝礼を写した写真に樹勢豊かな姿が確認でき、今も校庭の一角で当時と変わらぬ姿でたたずんでいます。

栗葉小学校(森町)のクスノキ(写真③)は、校舎

玄関前で太く真っすぐに伸びる幹が力強いたたずまいを見せていて、登校する児童を迎える学校のシンボリックな存在です。

村主小学校(安濃町連部)では、クスノキ2本とメタセコイア1本の大木(写真④)が、校舎を超えるほどの高さに成長した姿を示しています。

川口小学校(白山町川口)のクロガネモチ(写真⑤)は、これぞ“シンボル”と呼べる姿を校庭にとどめています。夏は暑さをしのぐ木陰を提供し、美術の時間には画題のモチーフになるなど、子どもたちの学習活動の中でも身近な存在です。

こうした樹木は、学校創立前からあるもの、学校の顔として校舎玄関や門の近くに植えられたもの、または校舎改築に伴って移植されたものなどさまざまな経緯から現在に至ります。

学校によって樹種も異なりますが、枝葉を大きく伸ばして子どもたちの成長と学習の様子を見守る姿は、昔も今も変わりありません。

